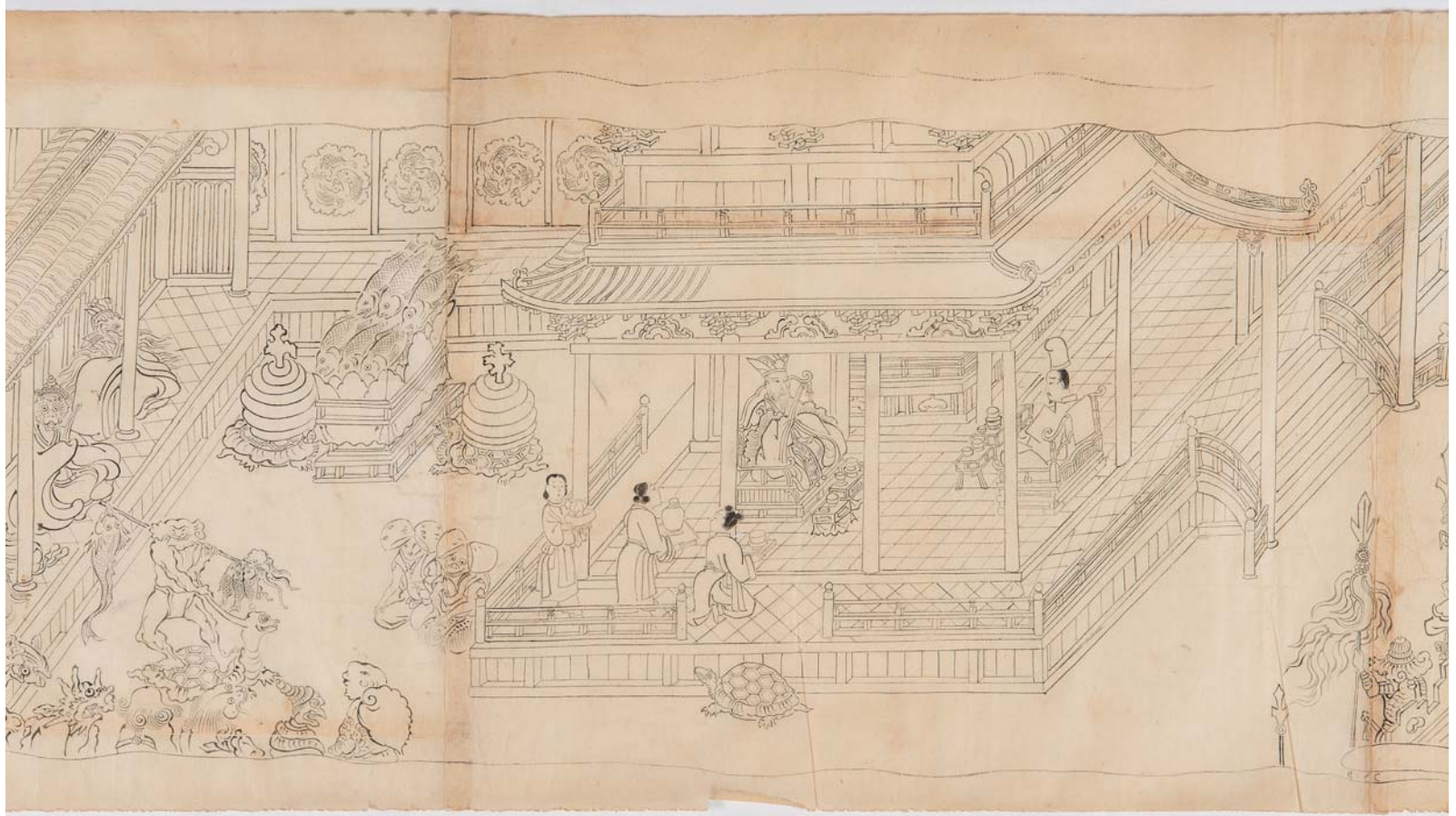




筑紫女学園大学リポジット

A Study on Painters of the Lord Kuroda:Ogata Morifusa and his Fujiwara Hidesato Ryugujo-zu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 知美, 日野, 綾子, 井形, 栄子, KOBAYASHI, Tomomi, HINO, Ayako, IGATA, Eiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/974



(口絵1) 尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿 絵5



(口絵2) 尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿 絵15

福岡藩御抱え絵師の研究（一）

尾形家絵画資料 尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿

（金戒光明寺本との比較を中心に）

小林 知美
日野 綾子
井形 栄子

はじめに

- 一 作品の概要
- 二 俵藤太絵巻の系譜における守房本の位置
- 三 守房本の原本の制作年代
- 四 守房の画業における位置
おわりに

はじめに

江戸時代の福岡藩の御抱え絵師に関しては、すでに福岡県立美術館所蔵尾形家絵画資料全体のデータが『尾形家絵画資料目録』¹、『尾形家絵画資料図版』²に収録され、小林法子氏による専論³が上梓され、

関連する展覧会⁴が開催されるなど、研究が進展してきた。次なる課題として、福岡藩御抱え絵師を、日本絵画史全体の中で―同時代的にも歴史的にも―位置づけることが視野に入ってくる。本共同研究の目的は、福岡藩御抱え絵師の作品を対象として、様々な観点から検討することにより、新たな絵画史的位置づけを試みることにある。

本稿で対象とするのは、尾形家絵画資料の中の尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」（目録番号一〇五三）画稿⁵である（口絵1）（口絵2）。尾形家絵画資料は、福岡藩の筆頭御抱え絵師であった尾形家伝来の四七〇〇余点の画稿を中心とし、尾形家歴代一〇代が制作したものを主とする資料群である。その中で詞書も含めた絵巻全体を写した作品は一〇点である。画稿全体の中で少数とはいえ、日本絵画史において特殊な発達を遂げ、中世以降大和絵の主要ジャンルのひとつとなった絵

巻の画稿の存在は、近世絵師の伝統学習の様相を知るための重要な手がかりとなると思われる。

尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿（以下「守房本」と呼ぶ）は、巻末墨書銘より延宝七（一六七七）年に尾形守房が写したものと知られる。その内容は「依藤太絵巻」として知られている御伽草子絵巻の白描模本である。本作品に関しては、管見の限り、小林法子による尾形守房（狩野友元）の古画学習の例としての言及¹⁾の他は美術史研究の上で取り上げられたことはなく、国文学研究の上でも紹介されていない。本稿では、まず守房本の概要を紹介し、現状の錯簡訂正を踏まえた上で、依藤太絵巻の系譜の上での位置づけを明らかにする。次に守房本の原本の制作年代について史料と表現の検討により考察し、最後に本作品の守房の画業における位置づけに触れたい。

一 作品の概要

本作品は、紙本墨画、未表装、裏打ち・軸とも付けず丸めて保存されている。【資料1】「藤原秀郷龍宮城図紙継ぎと法量」のとおり、天地三四・四、全長二四八五・四センチメートル弱。全体で一三五紙をつぐ画稿である。巻末に「小方喜六主」「延宝七年霜月末／絵十六切」（図1）、表紙外題に「藤原秀郷龍宮城図 尾形主」（図2）の墨書があり、巻頭に「尾形氏之珍藏」の朱文長方印がある（図3）。

小方喜六は、尾形家三代守房（寛文六（一六六六）以前〜享保一七（一七三二）年）の通称で、延宝七（一六七七）年は、延宝五年頃に



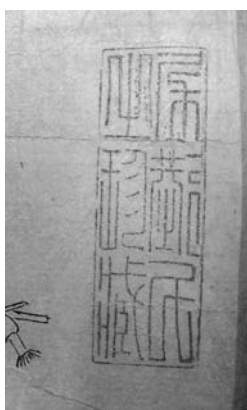
（図1）守房本 巻末奥書

表紙



（図2）守房本 表紙外題

「藤原秀郷龍宮城図尾形主」



（図3）守房本 巻頭
朱文長方印

印章
「尾形氏
之珍藏」

奥書
「
延宝七年月写
小方喜六主
繪十六切
」

狩野探幽の侍童であった守房が、尾形家二代守義の養子となり福岡に下向して間もないころと見られる。

本作品の主題は、「俵藤太物語」として知られる平安時代の武将藤原秀郷の武勇伝である。内容は二部構成で、前半は琵琶湖畔での蛭(むか)で、退治と龍宮訪問、後半は平将門討伐である。構成は段落式絵巻で、詞一七段、絵一六図で、首尾完結している。【資料2】「守房本と金戒光明寺本の比較」で一瞥できるように、本作品は、京都・金戒光明寺所蔵の三巻本と、詞書、図様ともほぼ共通している。

二 俵藤太絵巻の系譜における守房本の位置

数多く残る俵藤太絵巻は、詞書の内容から、流布本系と古本系に大別される。流布本系は、現在確認されている作品が一七本にのほり、寛永期(一六二四—一六二八)に刊行された絵入本系統である。一方、古本系は現在確認できるのは左記の通り六本で、時代不詳の作品が多い。守房本は金戒光明寺本に次ぐ古本である可能性が高く、制作年代が明確な作品として古本系の転写関係を明らかにする上で重要である。

・俵藤太絵巻古本系(六本)

- 一 金戒光明寺本 紙本着色 三巻 室町時代一六世紀
- 二 守房本 紙本墨画 一巻 天地三四・四cm 全長二四八五・四cm、延宝七(一六七八)年 尾形守房写

三 琴平宮本 一巻 光明寺本の絵部分のみの模本 天保一三(一八四二)年

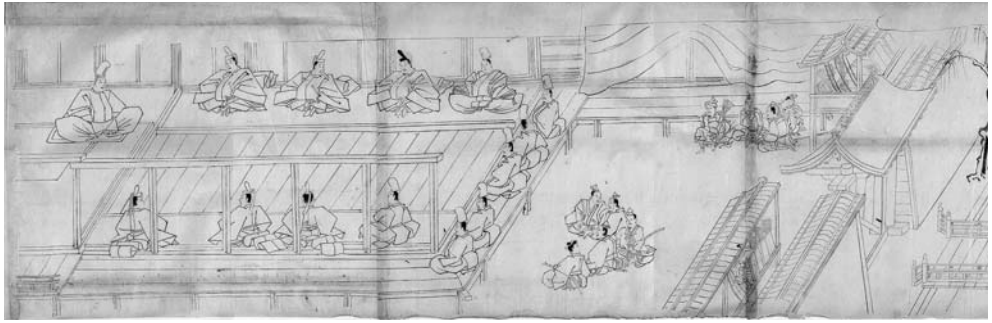
- 四 宮内庁書寮部本 三巻 時代不詳
- 五 東博本 一巻 時代不詳
- 六 東博本 一巻 時代不詳

まず、俵藤太絵巻の古本系における守房本の位置づけについて、詞書から確認しよう。

【資料三】「藤原秀郷龍宮城図 詞書翻刻」は、守房本の詞書を、古本系のなかで唯一全文が影印・翻刻で紹介されている金戒光明寺本を参照しながら翻刻したもので、両者の差異については註記している。

守房本と金戒光明寺本との比較から明らかになったことは下記①～⑤である。

- ①守房本は、詞書一七段、絵一六図の金戒光明寺本と同じ構成であり、金戒光明寺三巻が守房本では一巻となっている。
- ②両者の詞書文章はほぼ一致している。とくに金戒光明寺本にある錯簡が守房本に共有されている点は着目される。
- ③金戒光明寺本では、紙継をまたいで錯簡を描く部分がある。
- ④詞書の改行の箇所まで共通しているのは詞書一七段のうち八段のみで、それ以外では改行の箇所が異なっている。
- ⑤守房本は金戒光明寺本と誤字を共有し、さらに誤字・脱字が増加している。顕著な例として、「詞5」「龍宮城」での宮殿描写の脱行¹⁰、「詞11」「将門除目」での「将」の脱字など¹¹。文意が不明瞭となる顕



(図4) 守房本 絵9 将門除目(邸内列座図)



(図5) 金戒光明寺本 同上

著な脱字・脱行が認められる。

以上①②⑤から、守房本と金戒光明寺本の関係については、金戒光明寺本から守房本への直接または間接の転写(系統推定図A)、または共通の底本による転写と考えられる(推定系統図B・C)。③からは、金戒光明寺本に先行する底本(推定系統図Cの場合は原本)がすでに錯簡となっていたことが明らかとなる。

・ 詞書からみる俵藤太絵巻の写本系統推定図

A 原本 — (底本※錯簡) — 金戒光明寺本 — (底本) — 守房本

B 原本 — (底本※錯簡) — 金戒光明寺本

守房本

C 原本※錯簡 — (底本) — 金戒光明寺本

(底本) — 守房本

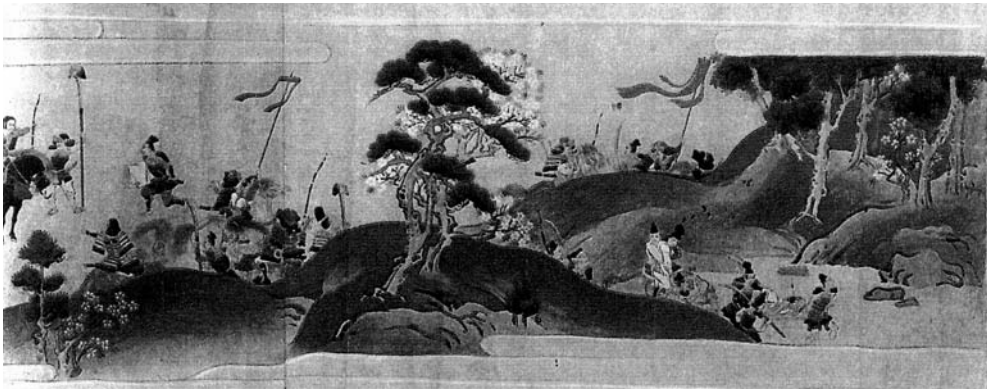
次に、俵藤太絵巻の古本系における守房本の位置について、図様から検討を加える。

守房本は金戒光明寺本に描かれていない図様を含む。例えば、「絵9」[将門除目]の将門の体躯が金戒光明寺本では半分しか描かれていないのに守房本では全体が描かれている点(図4・5)、「絵14」[将門首級上洛]で重要モチーフである将門の首級が、守房本に描かれているのに金戒光明寺本で省略されている点(図6・7)などである。

これらのことから、金戒光明寺本から守房本への直接または間接転写関係(推定系図A)とは考え難い。守房本は、俵藤太絵巻の古本系の



(図6) 守房本 絵14 将門首級上洛(行列図)



(図7) 金戒光明寺本 同上

現存作例の中で最も古い金戒光明寺本と原本を共有する転写本（推定系図B C）であることが推定される。原本から両本への転写系統が枝分かれしたのはいつか、またその間に単一または複数の転写本が存在するの否かは不明である。しかし金戒光明寺本と守房本が原本を共有することは確かである。

三 守房本の原本の制作年代

金戒光明寺本に関する諸説

では金戒光明寺本と守房本の共通の原本の制作年代はいつ頃であらうか。まず紀年銘のない金戒光明寺本の制作年代に関する諸先学の説を概観しよう。

金戒光明寺本に最も早く言及されたのは、長坂金雄氏で、「絵は光信筆と言ひ伝へているが、詳らかでない。一説には長隆と云ひ、『扶桑画人伝』には、春日行長とあるが、何れも確証があるのではない。更に他日の研究を要するものだ。物語の順序は非常に錯雑し、前後顛倒してゐる所が多い。」とする¹²⁾。

真保亨氏は、「この絵巻は、俵藤太物語で親しまれた絵巻・絵草紙のうち最も古いもので、絵の筆者を土佐光信と伝えているが、それよりも時代は下って、室町時代も末期に近い頃に制作されたものと思われる。絵の構図法や人物・山水の描写は大和絵の伝統的な形式によっており、いづれ古本を摸して作られたのであろう。」とする¹³⁾。

文献史料による検討

俵藤太絵巻に関する文献史料は三件である。

・『住吉家鑑定控』住吉広行（一七五五—一八一—）

「天明八年十一月五日 田安御殿へ被召出、従有徳院様田安様江被進候御道具江名附可致旨被仰付候ニ付左ノ通認上ル

「詞書世尊寺定成卿」

聖徳太子伝記 拾巻

古画之所土佐権守経隆筆與相見申候至而見事成品ニ御座候

右之通奉書小札ニ認遣ス内ニ拾貳三段可能常信書足シ有之

法然上人伝記 壹巻

土佐越前守長章筆與相見申候

乗馬之画 壹巻

冷泉為家卿筆與相見へ申候

俵藤太之画 壹巻

左近衛將監行長與相見へ申候

右四通り也」

・『扶桑画人伝』巻第一 明治一六（一八八八）年、古筆了仲

「○土佐家支流

○行長

土佐卜称し後子春日ト改ム隆親ノ三男左近將監ニ任ス父ノ教ヲウケ家法ヲ守リテ画ヲ能クス兄光長慶恩ノ長スル所ヲ得テ画風趣キアリ妙手ト縁起草紙ヲ描クニ名アリ承元中（一二〇七—一二一

白畑よし氏は「大体に情景の描写、構図、色調は鎌倉時代末期の絵巻を踏襲していて、個性のある芸術的風格は少ないが、しかし勢田橋上での秀郷と大蛇との対決の画面は迫真的な趣があり、また将門の頭を見物に集まった群衆の風俗的な表現にも、生彩のある好もしさが感じとられる。そうした点で凡手の筆致とは、必ずしも断定されない一面を具える。室町時代（十六世紀）の制作として、すでに絵巻の全盛期から遠ざかった遺品ながら、随所にその余薫がうかがえる。」とする¹⁴。

再び真保亨氏は、「本絵巻はのちの御伽草子のそれとは系統を異にし、同類の物語中では内容的に古様を示している。絵は土佐光信筆といわれているが、画風はそれより新しく、光信以降の室町時代末期に下る制作であろう。構図のとり方など絵巻の伝統をよく伝えており、彩色も華やかであるが、描写力が伴わず、衰退期の絵巻の一面がよくうかがわれる。錯簡があるが首尾完結している。」とする¹⁵。

村松加奈子氏は「迷いのない闊達な筆致、パターン化されていないのびのびとした人物表現は、室町初期の土佐派に通じる感覚がうかがえる。なお、同寺では土佐光信の筆と伝承されている。（室町時代一五世紀）」とする¹⁶。

前章で確認したように、金戒光明寺本は、紙継ぎ以外の箇所で錯簡となっている現状から、古本系の原本ではないと思われる、古本を写したという真保氏と白畑氏の説が正しいことになる。両氏のいう古本がそのまま原本とは限らない。その原本の制作年代について、文献史料と表現形式から検討してみよう。

○ノ人明治十六年迄凡六百七十五年

遺蹟著名ノ品

- 一 荏柄天神縁起
- 一 俵藤太草子
- 一 能恵法師草子
- 一 物語巻物残欠
- 一 一人磨ノ影
- 一 雑画

・『訂正増補考古画譜』巻七 明治四三（一九一〇）年、片野四郎

「俵藤太双紙 三巻

〔補〕本朝画図品目云、俵藤太双紙、黒谷光明寺什、絵光信、

詞、筆者未詳、〔黒谷金戒光明寺蔵、三巻歟〕

〔補〕倭錦云、春日行長、俵藤太草子

（木版図版「勢田橋をわたる秀郷」あり）

『住吉家鑑定控』では「俵藤太之画 壹巻」とあり、現存する古本系一巻本のいづれかに当たる可能性も皆無ではないが、後述するように行長筆とされる絵巻はいずれも着色であるため、今は失われた別本にあたる可能性が高いと考えられる。

『扶桑画人伝』では、行長筆として「荏柄天神縁起」「俵藤太草子」「能恵法師草子」以下三件が挙げられている。作品の巻数や着色の有無は不明である。

『訂正増補考古画譜』では「俵藤太双紙 三巻」とあり、補として『本朝画図品目』（毛利梅園著、文化元（一八〇四）年序）に云うとして土佐光信筆の金戒光明寺本所蔵三巻本が記されている。別の補と

して『倭錦』に云うとして「春日行長、俵藤太草子」とある。

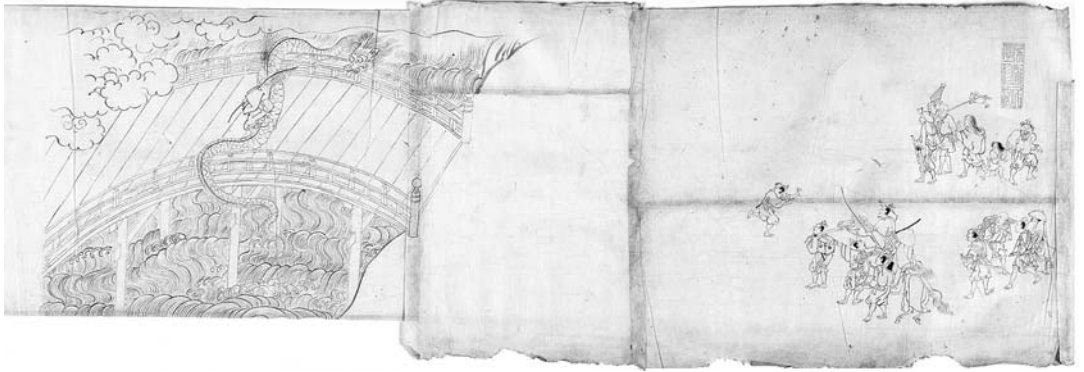
藤原行長説を三史料すべてが言及しており、金戒光明寺本三巻光信筆を紹介しているのは『考古画譜』の増補部分である。これらのことをふまえると、伝行長筆（一巻本）と伝光信筆三巻本を別作品とみなし、前者が原本そのものあるいはその転写本と考えることは可能である。

表現形式による検討

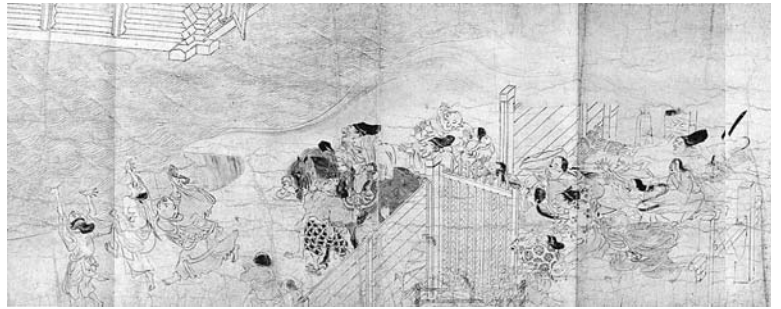
守房本の図様は金戒光明寺本と共通しているが、それは両者が原本から直接あるいは間接に継承したものといえよう。そこで守房本の表現形式から、原本の様式を推測したい¹⁷。以下、守房本の表現形式の特徴について、構図、人物描写、山水の順で確認していく。

構図は変化に富んでいる点が特徴である。行列図（口絵2）・戦闘図・邸内列座図（図4）など多様な構成を含んでおり、一図の画面の長さは基本的には幅八〇〜九〇センチ程度だが、行列図や戦闘図や廷内列座図などは最長二〇センチ程度と長く、変化をつけている。画面構成の工夫が各所にみられ、巻頭では左上方を見上げる群衆の中に逆勝手方向に走る人物を配し、見上げる方向には大蛇をまたぐ俵藤太を配し、対角線構図を用いて説話画のドラマチックな導入となっている（図8）。点は、『信貫山縁起絵巻』（図9）に代表される院政期の展開式絵巻のそれに通じ、山岳や建物を背景とした異時同図法（図10）の使用は、『玄奘三蔵絵巻』（図11）など鎌倉期の絵巻に通じる。

人物は頭体の比率が自然で、顔貌は細線を重ねて描写し、一部似絵風の詳細描写も見られる。衣文線は強装束は直線で、それ以外はやわ



(图8) 守房本 絵1 瀬田橋大蛇 (対角線構図)



(图9) 『信貴山縁起絵巻』 巻頭 (対角線構図)



(图10) 守房本 絵2 (異時同図)



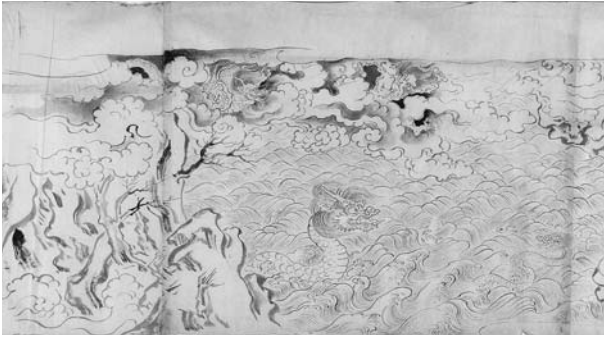
(图11) 『玄奘三蔵絵巻』 (異時同図)



(図13) 守房本 人物



(図12) 守房本 人物



(図15) 守房本 絵3 水波



(図14) 守房本 人物

らかな曲線で描き、部分的に打ち込みを入れる(図12・13・14)。

山水は、墨の濃淡やかすれを活かし、側筆を多用して凹凸感を出している。樹木も同様の筆致で、枝先を濃い細線で描き、葉は描かない。水波は、近くの大波、遠くの小波、渦巻きなどを、墨線の濃淡、太細の変化を駆使して描き分けている(図15)。

霞表現は自然で多様な構図を霞で連結している。一五図において画面の上辺全体に柵引かせ、そのうち八図においては画面の下辺にもかけている。霞の輪郭は淡墨線の直線か波線、先端は半円形で、線を描かずモチーフをかき消して表現する所もある。山岳場面では霞を幾段にも重ね、奇瑞場面では巻雲を描く。

描線については、薄く柔らかな線が基本で、モチーフに応じて描線を使い分ける。例えば建築物は細い直線で、人物は柔らかな細めの線で、山水や樹木は濃淡をつけた太目の抑揚線を側筆を用いて描く。

このような守房本の表現形式の特徴は、原本の反映だけでなく守房本人の技量によるところも大きいと考えられる。そこで、描写のレベルではなく、原本から継承した要素が比較的明瞭に見いだせられる構図のレベルで、原本の様式を遡及的に検討したい。

原本の制作年代

守房本の原本の構図の特徴を考えると、天神縁起絵巻を参考対象としてとりあげる¹⁸⁾。天神縁起絵巻は現存六〇点にのぼり、一三〜一九世紀まで継続的に制作され、しかも場面が共通しているため、絵巻の表現形式の時代的变化の基準としての有効性が高いと考えられるからである。また、俵藤太絵巻の伝承作者である藤原行長の奥書を持つ



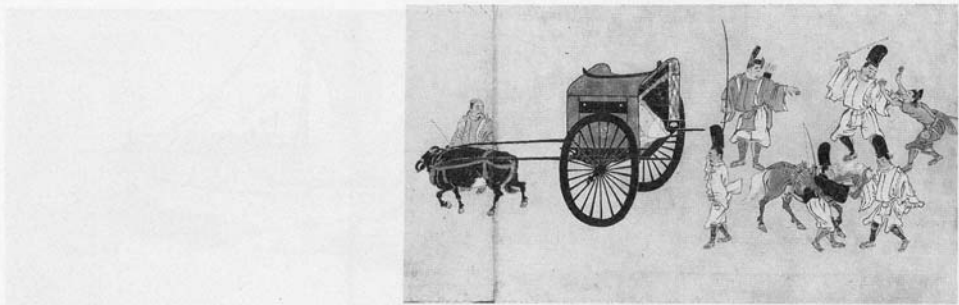
本八景

承久本



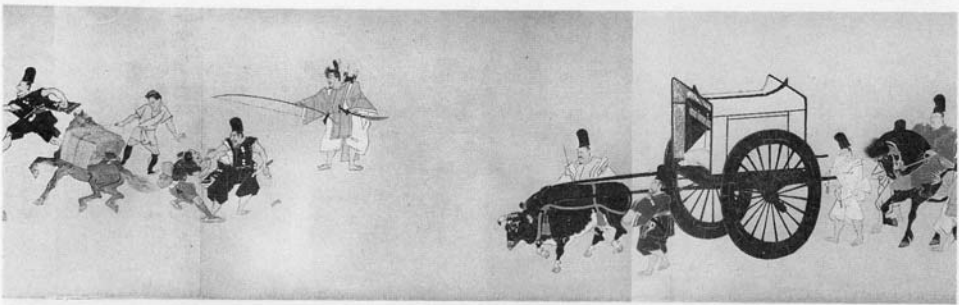
本四景

荏柄本



本四景

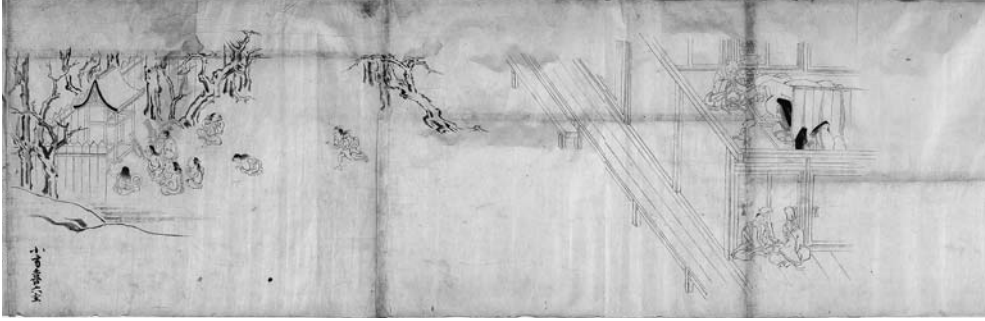
津田本



本四景

松崎本

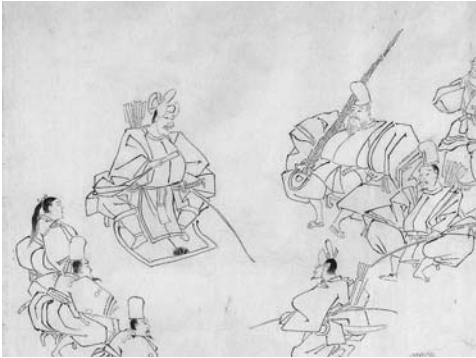
(图16) 北野天神縁起繪卷諸本 西下陸路



(図17) 守房本 絵16 明神の祠



(図18) 『荏柄天神縁起絵巻』綾子託宣 祠



(図21) 守房本 絵15
異形の太刀を持つ検非違使、放免



(図19) 守房本 絵16 泣く人物



(図22) 『法然上人絵伝』巻33第6紙
六條河原での安樂の死刑 検非違使



(図20) 『松崎天神縁起絵巻』巻2
恩賜御衣 泣く人物

荏柄本¹⁹（一二世紀前半）も含まれ、守房本の原本の作者の系統を考える上でも無視できないためである。

守房本と天神縁起絵巻諸本を比較した結果、最も構図が近似するのは荏柄本（一三世紀前半）²⁰と松崎本であることが明らかとなった²¹。例えば、行列図を比較すると、画面内に下方に行列、上方に見物する群衆を上下二段に配置し、その視点が近似している（図16）²²。

また個々の図様において、守房本の巻末（絵一六）「明神の祠」は、『荏柄天神縁起絵巻』綾子託宣の祠と近い（図17・18）。さらに同場面²³の泣く人物は『松崎天神縁起絵巻』卷二恩賜御衣の泣く人物と（図19・20）、守房本（絵一五）の異形の太刀を持つ検非違使、放免は、『法然上人絵伝』卷三三第六紙 六條河原での安楽の死刑の場の検非違使と図様が共通している（図21・22）。

以上、構図と図様の比較から、守房本は、松崎天神、荏柄天神、法然上人絵伝をはじめとする一四世紀前半ころのいわゆる隆兼系の絵巻と近似性が高いといえる。すなわち守房本と金戒光明寺本の共有する原本の制作年代は、『住吉家鑑定控』以来、伝承されてきた藤原行長の作とされる『荏柄天神縁起』（一三一九年奥書）と近い頃と考えられ、しかも様式的にも荏柄本と近いことが確認された。近世の古筆家による作者比定はある程度の妥当性を持っていたということになる。

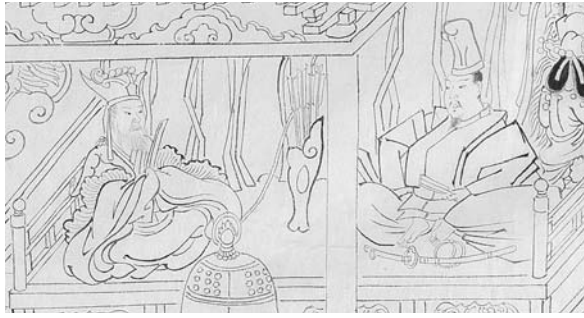
（小林知美）

四 守房の画業における位置

先述のとおり、本図を描いた小方喜六とは、福岡藩御抱え絵師尾形家の第三代守房（狩野友元）（？～一七三二）のことである。本章では、守房の画業と本作品の関係について考えてみたい。本図が写された延宝七年（一六七九）、守房は二二歳頃であったと推測される²³。守房は、下野国宇都宮の生まれであり、狩野探幽の侍童であったのを、尾形家第二代守義（一六四三～一六八二）にもらわれ養子となった。本図の写された前々年である延宝五年（一六七七）頃、守房推定二〇歳の頃までには、尾形家の養嗣子となっていたと考えられる。【資料四】「尾形守房の制作した画稿」のとおり、尾形家の養子となる前の野中姓であった時代、守房は多くの画稿を制作しており、守房の描いたと見られる画稿一三四点中、六五点が野中姓時代のものである²⁴。特に当時師事していた狩野探幽の画の写しが多い。本図は、守房が野中姓から尾形（小方）姓に改めたのちの年記のある作例では、三例目のものである。

このように、本図は守房が尾形家の養嗣子となって間もない二〇代前半期の画稿と推測されるが、その筆線からは、若くしてすでに確かな画技を身に付けていたことが窺える。モチーフによって使い分けた墨の濃淡や線の太細、肥瘦線、あるいは淀みない筆の流れなどは、本図が別の絵巻の写しであることを差し引いても、絵師の技量の高さを示すものであろう。

守房が本図を写した経緯は明らかではない。金戒光明寺の《俵藤太



(図23) 守房本 絵6



(図24) 金戒光明寺本 絵6

絵巻』との図像の共通を考えれば、まず、本図が京都において金戒光明寺本より写された可能性が考えられるだろう。歴代福岡藩主は、江戸からの帰路など、折に触れ京都の黒田如水の菩提所・龍光院に参拝することが慣例となっており、また、宝永四年（一七〇七）に友元が京都において写したと記される白衣観音図が残存することから、多かれ少なかれ守房が京都に赴く機会を得ていたことが分かる²⁵。しかしながら、前章までに確認したように、金戒光明寺本から本図が直接写されたと考えるのは難しい。守房本と金戒光明寺本を比較してみると、両本の構図や描かれているモチーフはおおむね同一であるが、先述したように、図様の切れている箇所や表現の異なる箇所も散見される。また、守房本においては、龍宮城の場面など、建物の屋根や床に細かな文様のパターンが描かれている箇所が省略が見られる。

筆線等の細かな絵画表現について見ていきたい。面貌表現においては、守房本では金戒光明寺本と比較してやや眼を小さく、また両眼をやや離して描写する（図23・24）。さらに、守房本の方が小鼻が小さく、老翁の髭などの毛髪はより細線で描かれる。上巻前半に描写される波には、外形を墨線でかたどり、内側にやや細い墨線を六〜七条ほど沿わせるという表現が、守房本、金戒光明寺本ともに見られる。しかし、金戒光明寺本では緩やかなお椀形に表現される波が、守房本では波の稜線をほぼ直線かわずかに反らせるようにし、先端のやや尖った山型に描かれている点に違いがある（図25・26）。また、同じく上巻の前半部分に見える山の表現においては、双方とも山肌や岩場の表現に線の太細や側筆、渴筆を用いていることには変わらないのだが、



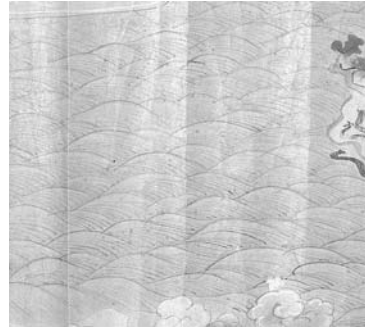
(図27) 守房本 絵4



(図25) 守房本 絵2



(図28) 金戒光明寺本 絵4



(図26) 金戒光明寺本 絵2

守房本の方がそれらをより多用しているように見える(図27・28)。同じく樹木も、金戒光明寺本より守房本の方がより肥瘦線を多く用いている。

さらに、双方を比較すると、守房本では樹木の葉や花の部分において、緑青や胡粉の使用されている箇所描写が省略されていることが分かる(図27・28)。墨線のみ模写に徹した結果であろうか。加えて、図中に色註が全くなされていないことも留意すべきである。これらのことから、本図を写した目的が、のちに正式な絵巻に仕立てるためではなく、絵師の勉強のための作例収集の意味合いが強かった可能性、あるいはそもそも写した底本自体が画稿的な性格を持つもので、着色や色註が施されていなかった可能性が考えられるだろう。

(日野綾子)

おわりに

本稿では、尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿が、俵藤太絵巻の古本系の首尾完結した写本であり、古本系最古作とされる金戒光明寺本と原本を共有する姉妹関係の転写本であることを、詞書と図様の比較検討から明らかにすることができた。また、守房本と金戒光明寺本の共通の原本の制作年代については、文献史料と表現形式の考察から一四世紀前半頃と推定できるとした。

本作品の成立について、守房が何処で何を底本として何のために模写したかは不明である。しかし、その細部まで忠実な模写態度と、着

色の金戒光明寺本と比較して顕著な線描重視の画風からは、守房自身が作例収集と技術習得のため、絵巻模写に取り組んだ可能性も指摘できる。守房は描線に対する関心が高かった事が指摘されているが²⁶、そのような絵画的志向性が看取される作例として、本作品は重要な位置にあるといえよう。(小林知美)

注

- 1 福岡県立美術館編纂『尾形家絵画資料目録』(西日本文化協会、昭和六一年)
- 2 福岡県立美術館編纂『尾形家絵画資料図版』(西日本文化協会、昭和六一年)
- 3 小林法子『筑前御抱え絵師』(中央公論美術出版、平成一六年)
- 4 福岡県立美術館『特別展御用絵師 狩野探幽と近世のアカデミズム』(福岡県立美術館、昭和六二年)、魚里洋一企画・編集『斎藤秋圃と筑前の絵師たち…筑前四大画家の時代』(福岡県立美術館、平成一四年)
- 5 註一前掲書一五七頁。
- 6 大島由紀夫「解説」(吉田祐輔・荒井克利編『蘇る絵巻・絵本チエスター・スターピーティ・ライブラリイ俵藤太物語り絵巻』勉誠出版、平成一八年)
- 7 二系統以外に徳川達孝伯爵所蔵本(紙本墨画、一卷、竪一尺四分、全長二丈二尺三寸、鎌倉末南北朝)がある。現在所在不明で詳細不詳であるため本稿では触れない。著者不明「藤原大草子」(『国華』二四編二八

六号、大正三年三月)参照。

- 8 註五前掲書一三三頁。
- 9 現第四・六・七・九・一二・一三・一五・一六段。
- 10 【資料三】註19参照。
- 11 【資料三】詞書第十一一段16行目。
- 12 長坂金雄「秀郷草紙」『日本風俗史講座第一二絵巻物図説』(雄山閣、昭和四年)
- 13 真保亨「俵藤太絵巻」『妖怪絵巻』(毎日新聞社、昭和五三年)
- 14 白畑よし「俵藤太絵巻」(奥平英雄編『御伽草子絵巻』角川書店、昭和五七年)
- 15 真保亨「俵藤太絵」『絵巻物総覧』(角川書店、平成七年)
- 16 村松加奈子「俵藤太絵巻」解説(サントリイ美術館・龍谷大学周龍谷ユージアム「水」神祕のかたち』平成二七年)
- 17 金戒光明寺本については、部分的カラー図版は紹介されているが、全体に関してはモノクロ図版しか入手できないため、詳細な比較検討は難しい。本論文では実地調査による詳細比較の可能な守房本により原本を推測する。
- 18 須賀みほ『天神縁起の系譜』(中央公論美術出版、平成一六年)
- 19 『荏柄天神縁起』紙本着色、三卷、前田育徳会蔵(荏柄本)。
奥書
「天満天神、利生利物、薩埵之応現、
権化之方便。緝入幽玄、筆難觀縷、
唯旧談之所伝、世論之不忘、模之

丹青、彰其奇特、勒成一部、相并三軸、聊依有中丹之緒願、所企此後素之画功也。一奉納宝殿之後、

再莫出瑞籬之外、信心之至、廟鑿定照、感心之余、宿望尽成。于時宝曆元応屠維之年、玄律大呂告朔之朝而已。

右近将監藤原行長」

荏柄本の制作年と作者について下記の研究経過がある。奥書の元応元（一二一九）年は制作または奉納された年とみなせるが、「右近将監藤原行長」については、数多くの二三・一四世紀の天神縁起絵巻のうち、絵師自ら制作・奉納した例は無く、また絵師が奉納者と名を連ねることはあるが単独で奥書を書く例も無いため、奉納者とする説が有力であった。しかし荏柄本と同じ奥書含む和歌浦本の発見によりその節が覆った。すなわち貞享二（一六八五）年、北野聖廟の行長本を写し、紀伊国の天満宮（和歌浦天満宮）に源重盛によって奉納された和歌浦本は、詞書の正確性から荏柄本唐の転写本ではあり得ず、両本は姉妹関係であるため、荏柄本は、奥書の元応元年からそう隔たらない時期（一三世紀前半カ）におそらく京都で転写されたと考えられるようになった。

・『天神縁起絵巻』紙本着色、三巻、和歌浦天満宮蔵。
卷第三末尾、

「前半は荏柄本奥書と同文」

貞享二乙丑歳臣佳南紀之秋

写行長北野聖廟所納之縁

起謹納于紀伊国海士郡明光

〔浦首神聖廟者也于時八月

廿五日從五位下水野隱岐守

源重盛九拜」

21 真保亨「荏柄天神縁起について」『三浦古文化』四四（北野聖廟絵の研究）中央公論美術出版、平成六年

22 「行列図」（秀郷上洛）に構図に近い作品としては以下が挙げられる。

『春日権現験記絵巻』（二二〇九、高階隆兼）、『荏柄天神縁起絵巻』（二二一九、行長原本）西下陸路（図一四）、『石山寺縁起絵巻』（二二二五）一九世紀、隆兼周辺ほか）東三条院の石山寺参詣。ほかに「合戦図」（将門合戦、将門首級上洛）に関しては、『石山寺縁起絵巻』（二二二五）一九世紀、隆兼周辺ほか）卷六第五紙～九紙、『春日権現験記絵巻』（二二〇九、高階隆兼）卷一第五紙等が挙げられる。

23 小林法子『筑前御抱え絵師 研究篇』（中央公論美術出版、平成一六年）七八～七九頁。享保九年（一七二四）に博多崇福寺へ寄付された寒山拾得図に友元六七歳の行年書があり、この年に友元が行年書通りの年齢であれば、尾形家の画稿に亀之助の名が初めて確認される寛文九年（一六六九）は十二歳、守義の養嗣子になった時期であろう小方喜六初見の延宝五年（一六七七）には二〇歳ということになる。小林氏はこの年齢設定を妥当としており、これを目安に考えれば、本図の制作時に守房は二二歳であったと推測できる。

24 『尾形家絵画資料 目録』『尾形家絵画資料 図版』（福岡県立美術館編、

西日本文化協会、昭和六一年）に拠る。この総数においては、尾形家絵画資料中の「小方喜六」と記されたものでも年記の無い資料は除外している。喜六という名は、守房以外にも七代目洞谷から十代目洞眠までが用いており、制作年不明のものは、現段階では絵師の特定が難しいためである。

25 前掲註1、一七八〜一七九頁。

26 「第3章 画業―絵画史における業績 第3節 百鬼夜行絵巻」〔筑前御抱え絵師 研究篇〕（中央公論美術出版、平成一六年）

（こばやし）ともみ…アジア文化学科 准教授

（ひの）あやこ…九州歴史資料館 学芸員

（いがた）えいこ…元熊本県立美術館 学芸員

【附記】

本稿は、平成二九年度筑紫女学園大学人間文化研究所の共同研究「九州諸藩御抱え絵師の研究」（共同研究者…日野綾子、井形栄子）の成果であり、口頭発表「依藤太絵巻の系譜―福岡県立美術館所蔵尾形家絵画資料 守房筆『藤原秀郷龍宮城図』の位置づけ」（第九九回近世美術研究会、平成三〇年四月二八日開催、於 筑紫女学園大学）をもとに加筆したものである。全体にわたり共同して作業をおこなったが、責任担当者は左記の通りである。

本論（第四章以外）…小林知美

本論第四章、【資料三】【資料四】作成…日野綾子

【資料一】【資料二】作成…井形栄子

なお、作品調査にあたってご理解・ご協力を賜りました福岡県立美術館副館長魚里洋一氏、学芸員中島由実子氏、同高山百合氏、写真撮影に携わっていただきました九州歴史資料館学芸員井形進氏に感謝の意を捧げます。

【図版出典】

守房本（福岡県立美術館所蔵） 全て筆者撮影

図5、7、【資料二】金戒光明寺本全図 『御伽草子絵巻』（角川書店、昭和五七年）より転載

図9 千野香織『小学館ギャラリー新編名宝日本の美術― 信貴山縁起絵巻』（小学館、平成三年）より転載

図11 小松茂美編『続日本の絵巻四 玄奘三蔵絵 上』（中央公論社、平成二年）より転載

図16 神保亨『北野聖廟絵の研究』（中央公論美術出版、平成六年）より転載

図18 須賀みほ『天神縁起の系譜』（中央公論美術出版、平成一六年）より転載

図20 山口県立美術館『松崎天神縁起絵完成七百年記念 防府天満宮展― 最初の天神さま―』（平成二三年）より転載

図22 小松茂美編『続日本の絵巻― 法然上人絵伝 上』（中央公論社、平成二年）より転載

図24、26、28 『妖怪絵巻』（毎日新聞社、昭和五三年）より転載

【資料1】藤原秀郷龍宮城図 紙継ぎと法量 (単位: cm)

(11)	(9) 26.8 × 40.4	(8) 29.3 × 40.4	(6) 9.2 × 20.8	(4) 18.4 × 40.4	(3) 26.8 × 17.9	(1) 25.7 × 40.5
(12)			(7) 24.8 × 20.8			
	(10) 7.2 × 40.4					

第1紙天地34.4cm

(21) 12.5 × 40.6	(19) 15.9 × 22.3	(17) 10.2 × 40.8	(15) 15.2 × 41.0	(13) 21.1 × 40.4	(11) 4.1 × 40.8
(22) 22.2 × 40.6	(20) 18.5 × 22.3	(18) 24.3 × 40.8	(16) 19.3 × 41.0	(14) 13.4 × 40.4	(12) 28.8 × 40.8

(33)	(31) 21.9 × 20.9	(29) 22.0 × 40.4	(27) 28.4 × 40.3	(25) 9.4 × 40.2	(23) 6.1 × 41.6	(21)
(34)	(32) 12.1 × 20.9	(30) 12.8 × 40.4		(26) 25.2 × 40.2	(24) 28.5 × 41.6	(22)
			(28) 6.3 × 40.3			

(44) 17.3 × 40.0	(42) 24.4 × 40.3	(40) 22.3 × 19.0	(37) 3.0 × 39.8	(35) 9.3 × 40.2	(33) 15.6 × 40.3
(45) 17.2 × 40.0			(38) 28.5 × 39.8	(36) 25.2 × 40.2	(34) 19.0 × 40.3
	(43) 10.6 × 40.3	(41) 12.2 × 19.0	(39) 3.9 × 39.8		

(55)	(52) 4.8 × 40.2	(50) 11.1 × 39.8	(48) 6.4 × 42.2	(46) 28.2 × 39.7	(44)
	(53) 28.3 × 40.2		(49) 27.9 × 42.2		
(56)	(54) 1.5 × 40.2	(51) 23.7 × 39.8		(47) 6.0 × 39.7	

(65)	(63) 27.3 × 39.9	(61) 12.7 × 41.2	(59) 13.7 × 40.3	(57) 20.1 × 39.8	(55) 27.0 × 40.0	(52)
	(66)	(64) 7.4 × 39.9	(62) 21.8 × 41.2	(60) 20.8 × 40.3		(58) 14.7 × 39.8
					(56) 7.5 × 40.0	(54)

(75)	(73) 9.2 × 40.0	(71) 15.7 × 40.2	(69) 22.2 × 40.1	(67) 9.3 × 40.4	(65) 29.0 × 40.3
(76)	(74) 25.3 × 40.0			(72) 18.7 × 40.2	
(77)			(70) 12.3 × 40.1		(66) 5.7 × 40.3

(86) 11.5 × 40.0	(84) 17.9 × 39.5	(82) 24.7 × 40.3	(80) 15.7 × 41.2	(78) 16.3 × 16.9	(75) 2.8 × 40.0
(87) 23.6 × 40.0				(81) 18.9 × 41.2	(79) 18.3 × 16.9
	(85) 16.5 × 39.5	(83) 10.0 × 40.3			(77) 3.5 × 40.0

(98)	(96) 27.4 × 16.5	(94) 19.8 × 40.5	(92) 26.7 × 40.1	(90) 5.0 × 40.0	(88) 23.3 × 22.9	(86)
(99)	(97) 12.3 × 16.5	(95) 15.0 × 40.5		(91) 28.1 × 40.0		(89) 11.6 × 22.9
			(93) 7.8 × 40.1			

(109)	(107) 19.3 × 40.3	(105) 26.0 × 40.0	(102) 4.8 × 40.3	(100) 29.3 × 40.1	(98) 12.8 × 39.8
(110)	(108) 15.1 × 40.3		(103) 28.2 × 40.3		(101) 4.8 × 40.1
		(106) 8.1 × 40.0	(104) 1.1 × 40.3		

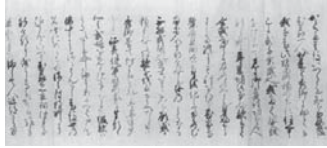
(119)	(117) 19.7 × 39.5	(115) 26.8 × 39.6	(113) 7.7 × 40.2	(111) 5.8 × 39.7	(109) 12.6 × 40.2
(120)	(118) 14.8 × 39.5		(114) 26.8 × 40.2	(112) 28.2 × 39.7	(110) 22.0 × 40.2
		(116) 7.4 × 39.6			

(130)	(128) 19.8 × 40.0	(126) 13.8 × 37.3	(124) 27.1 × 39.6	(121) 5.6 × 40.2	(119) 13.2 × 39.6
(131)	(129) 14.8 × 40.0	(127) 20.7 × 37.3		(125) 7.5 × 39.6	(122) 28.0 × 40.2
				(123) 1.0 × 40.2	

(134) 26.4 × 38.5	(132) 6.5 × 39.0	(130) 13.2 × 40.2
	(133) 28.0 × 39.0	(131) 21.4 × 40.2
(135) 8.1 × 38.5		

1巻135枚継ぎ 全長2485.4cm

【資料2】 守房本（上段）と金戒光明寺本（下段）との比較



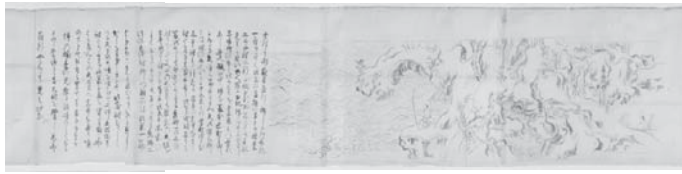
詞2



絵1



詞1



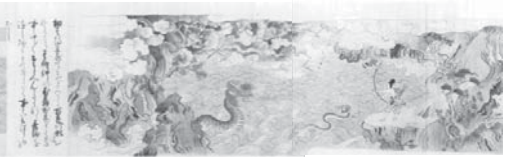
詞3



絵2



詞5



絵4

詞4

絵3



絵6



詞6



絵5



絵7

詞8

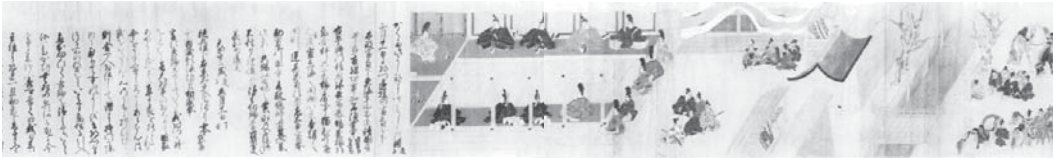
詞7



詞10

絵8

詞9



詞11

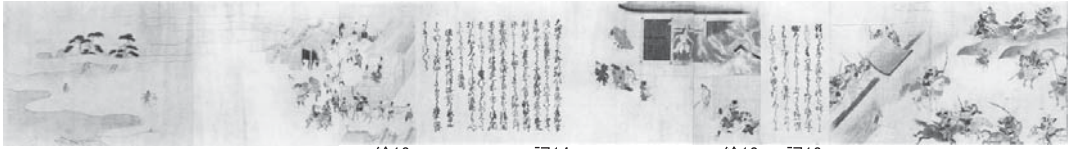
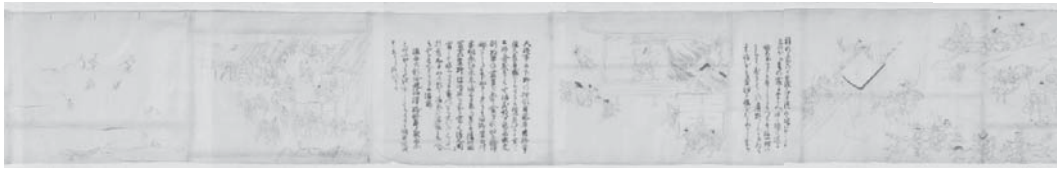
絵9



絵11

詞12

絵10



絵13

詞14

絵12 詞13



絵15

詞16

絵14 詞15



絵16

詞17



【資料三】「藤原秀郷龍宮城図」詞書翻刻

〔凡例〕

- 判読困難な箇所は□で囲むか（ママ）と注記、紙本の欠落箇所は「」で表した。
- 翻刻に際しては、奥平英雄編『御伽草子絵巻』（角川書店、昭和五七年）に掲載されている金戒光明寺本の詞書を参考にした。字句の異なる箇所重要と判断したものは、注に記した。

〈上巻〉

【第一段（詞1）】

夫人皇六十一代の帝朱雀院¹の御宇「」

あたり承平壬辰歳神無月廿日²余り□「」

なるに江州勢田³の橋に大蛇はひかゝり□り

ければ往來の貴賤肝魂をうしなひたや⁴

過る者なかりければ万民愁をなした、

橋のこなたかなたに立わつらひはうせんとし

てそ居たりける爰に藤原秀郷⁵と云

者有けるか此由を聞て安からぬ事

なりとて身をやつし旅人の姿に出

立てあみ笠を差し着しつ、弓箭はかり

小方喜六写

を持た、一人橋のかたへに來り此有様

を見て少もは、からず大蛇の背の上を

あららかに踏て靜にそ通りける其時

みる人毎に肝をけしあきればて、そ居

たりける大蛇すこしもはたらかすして

「」儘失にければ諸人安堵の思ひをなし

「」後たやすく橋をわたりける

「尾形氏之珍藏」（朱文長方印）

【第二段（詞2）】

かくて其後いつくとも知す白髮成老翁

一人出來り秀郷に向て云我は是此

勢田の橋⁶の下に住事已に貳年^{ママ}余歳也

我多くの貴賤をはかりて見に御邊程

切なる人なし我に年來地を争ふ敵

有て合戦度、に及ふといへとも身ふせう

にして終に其利を得ず鬼界高麗

辰旦国迄も身を化してたのむへき

人を尋けれども汝のことくなる無双

武勢の武士いまたみす願は我に頼まれ

て彼敵を伐てたへかしと云は秀郷答て

何よりそれこそ安き事なれ征夷使⁷

軍監⁸の家に生る、心は武略を先とす

事なれば縦敵はうたすとも命は汝に

あたへて尸を海中にさらさん事は

後世の名聞にあらすやさらは彼所に

趣かんといへは老翁先立相つれて行ける

に誠に鳥もかけり難き深山なれば

まして人跡絶たる万仞⁹の嶺にのほり

千尋ふかき谷に下り行程に碧石そはた

てる蒼海の邊に來りぬ其時彼老

翁語りて云爰にて待給ふへし敵は

大蛇也深更に及むて風雨一通り過は

必來るへし我は又小蛇となりて敵を

おひき來るへし必と云捨て翁た

ちまち去ぬ秀郷唯一人老翁の

教のことく渚に立て待けるか雲海

泥、として泪天に日白暮煙浪漫、

として誠こ、ろほそしとも云はかり

なし然とも弓矢を心に憑みつ、いさや¹⁰

くと待居たり

【第三段（詞3）】

去程に漸夜半過にも成しかは雨風

一通り過て比良の高根¹¹の方より焼松

二三千程二行に燃せる物見えたりすはや

是そと思ひ五人張¹²にせき弦かけてくひしめし

三年竹のふしちか¹³なるを十五束みつふせ¹⁴に

こしらへ鏃の中根を筈本¹⁵迄打とをし

にしたる矢唯三筋手はさみ矢比近く成し

かは件の五人はりに十五束みつふせ打つかひ

忘る、程に引しほり眉間の真中をそ

射たりける其箭手筈し鉄などを射やうに

筈を返してそ立たりける秀郷一の矢を

射そんして又二の矢を番て態前の矢坪¹⁶を

とこ、ろさし射たりけるに此矢も亦前の

ことくおとり返りてそ立たりける秀郷二

つの矢を射損しつ頼所は此箭一筋

なり如何かはせんと思ひけるかきと案し

出したる事有とて此度射むとし

ける矢さきに唾を吐かけて又同し矢所をそ

射たりける此箭に毒を塗たる故にや

よりけんこの矢眉間の真中を通り喉

の下まで羽ふくら¹⁷せめてそ立たりける

件の燈松の光忽に消島のことくなる

もの、たをる、音大地を響し太山も

崩る、やらんとそ覺えける

【第四段（詞4）】

扱其後立寄て是を見るに百足の蛟¹⁸にて
そ有ける其時件の老翁出来りて慶
事中くたとへんかたもなし秀郷を
請し様々もてなしける事は云はかりも
なし

【第五段（詞5）】

秀郷是そ音に聞龍宮城と覺しえて行程に
一つの楼門有是を開ひて内に入に瑠璃の沙玉
の炬にて¹⁹自らふんくたり朱楼紫殿玉
のらんかん金を鐘にし銀を柱とし誠其粧ひ
奇麗目にも見すまして耳にも聞さ
りし所也彼老翁衣冠た、しく引
扱左右侍衛の官前後花の粧ひ云計
もなし秀郷をいねうかつかう中く
筆にもつくしかたし

【第六段（詞6）】

其後巻絹鏡申かしら結たる
俵²⁰二つ赤銅のつり鐘一つ秀郷に
あたへて云必御邊の門葉に將軍に
成人多かるへしとそしめしける秀郷に²¹

彼老翁にいとま乞竜の宮こそそ出
にける誠に秀郷の弓箭の道に天下
にかたをならふる者なかりしも理りと
こそ聞えけれ

【第七段（詞7）】

秀郷都に帰り此絹を切つかふに更に
尽る事なし俵は納物をとれ共是又
尽る事なかりき扱こそそれよりたわら
藤太とは云けるとなり其俵は産葉の
寶なれはとて是を倉廩²¹に納る鐘は梵
砌²²の物なれはとて江州三井寺²³へ是を
奉るなり此鐘を聞輩は無明長夜の
夢をおとろかし慈尊出世の曉²⁴を待末
代不思議の事共なり

〈中巻〉

【第八段（詞8）】

同御宇天慶二年己亥三月九日²⁵にけんしやうの
除目²⁶おこなはる藤原秀郷上四位下に叙して
武藏²⁷と上野²⁸両國の守に任し鎮守府の將軍
をけんしてきりたいらけ永く子孫に傳り
て子息千常²⁹從五位下に叙して下野守に

任す彼張郎か一卷の書を授て立所に師傅

の位にのほるもかくやとこそは覚えけれ

平貞盛³⁰は上平太成けるか従五位上³¹に叙し

て陸奥³²守に任す宇治民部卿忠文³³は副

將軍なりしかとも下向なき以前に將門³⁴

うたれ給ひければ道より帰りけり是も同

賞に蒙るへきよし申けるに小野宮殿³⁵

一座にてうたかはしきをおこなはされと云文有

とて捨られけるを九條殿³⁶次座にて

形³⁷のうたかはしきをおこなはされと

賞のうたかはしきをはあたへよと云文を

ひきて申させ給ひけれとも僉義³⁸に

つきてやみにき

【第九段（詞9）】

凡秀郷の弓箭の勢かんのきうしんしへい

の御ことにも越たり昔より敵を亡し

て將軍を蒙人多しといへとも或は

一代或は二代なり此秀郷は子息の代に

傳りて鎮守府の將軍を蒙る事異國

にはしらす我朝にはかゝるためしなし

いはんや末代に有へしとも覚えす弓

箭とる身は誰もかくこそあらまほし

けれと人々申あへりけれ

【第十段（詞10）】

貞盛は都に有けるか彼地に馳下

合戦度々に及といへとも將門は白髪と

て三尺かたちは弓箭太刀かたなよらぬ

鎧を着しつゝ、八方栗毛とて梢をつたひ

水の上をもはしる龍馬に乗戦けるに凡夫の

面を向ふへきやうもなかりければ其本意を

とけす縦鷹の下の雀鼠の上の猫のことくにて

都へ歳月をそ送りける將門情思ひけるはむかし

の景帝天皇³⁹は五代王位をもたせ給ひて

後位に即せ給ひき我は是天照太神⁴⁰三

十八世の御末神武天皇⁴¹六代の孫也

十禪の主に備はらん何の憚有へき其上

天照太神正八幡大菩薩も争百王の位に

もらし給ふへきとて謀叛をおこして東八

十國⁴²を打随へつゝ、天慶二年十一月十五日

下野國相馬の郡に都をたて平親王

といは、れ百官を勸初⁴³め除目をとりおこ

なひ八ヶ國に任る人々武蔵權守興世⁴²は

上野守なる坂上近高は武蔵守に任

し相馬の三郎まさつくは下野守

同七郎まさふんは相模⁴³守旣別當田上
往基は上総⁴⁴守藤原の玄武は常陸守
同相馬与一正義は下野守同余次正衛⁴⁵は
伊予守にそなりける

【第十一段（詞11）】

かくて此よし都に聞えしかは同庚子
正月十一日⁴⁶に将門追拔^{（マツ）}の官符被下

太政官符下東海東山両道諸国司

早^{〔応〕}有殊功輩加^{〔名〕}須賞事 此官旨

被案句

右平将門積悪弥長宿暴暗歳狼指

烏合群只忘榔^{〔慶〕}事獨知井底之^{〔廣〕}

宣忘海之開闢以来本朝之間^{〔別〕}逆其

末有法者左大臣宣奉勅宣御^{〔固〕}章^{〔永〕}

敬魁師者募以来此条、只賜以田地之賞

永及子孫傳之不^{〔粧〕}夕次^{〔隣〕}者随其功賜

菅罰者更承知^{〔勿〕}違矣

天慶三歳庚子 正月十一日丁亥

従五位下右京大夫⁴⁷尾張号零右少弁正五

内藏頭源朝臣相織奉

爰に秀郷しめしていはく我「将」門か体を
見むに若大將軍の相ありて國家あやうかる

へくは直に命を捨てかれか命をうはふへし
若さもあらずんは戦をいたさんと心のうちに
誓ひつゝ、則舎一人相供して潜在将門^{（マツ）}
か陳内^{（マツ）}に至りて事のよしを云将門け
つる所の髪をもしはす烏帽子引入急出向
ひて秀郷を請していはく汝は是本朝
無双の兵何か故に今爰に來給ふ秀郷
答て曰我日來は王位に恐れ一旦勅命に
したかふといへとも汝まさに略位たくし
かも勝負の色を見す國の主たらん事
あに疑ひなし於向後みかたにして
た、かひを致んと云其時将門歡喜のあ
まりに酒をすゝむ時に真志をあらはさし
めんこの⁴⁸ために先将門に吞せて其後種々
の契約をなして出られけるか情将門を
見るに其相かろしてかたき粧なし
人君の体にあらず偏に國土のほうそく
なり合戦をいたして命をうは、ん事
案の内なりとて直に勝負をせずして
出られけり

〔下巻〕

【第十二段（詞12）】

同十四日庚戌秀郷貞盛以下の軍兵下野の國
相馬の郡にして將門と合戦た、かひに
命をおします時をうつすさたもり身命
を捨万死にいり一生にいて、た、かひけるか
未時に矢合⁴⁹して散々に戦官兵凶徒に撃
反されて死する者八十餘人疵を蒙る者は
其数をしらす貞盛秀郷等引退刻に
將門勝に乗て責戦ふ其時さた盛秀郷
精兵をすくり身骨を碎き反合て戦ひ
ければ程なく凶徒打まけて手を三ひやうに
まとはし身を四方にのかし馬は風飛の歩⁵⁰を
忘れ將門は李老か術⁵¹をうしなひいまを
限りとおもひ門に打出る處に秀郷か
子息千常父の射のこせる矢をとり將門か
馬の額を射わり尾の下へ射出し次の箭
にてひのほねをそ射たりける然れ共
將門も馬もすこしもさはかす眼を見
ひらきてそ立たりける

【第十三段（詞13）】

程なく家内に火をかけければ□はそらに

立のほり春の霞にたくへつ、猛火〔邊〕に
燃あかりさもゆゝしかりつる有様一時の
うちにやきはらひ廣野となりぬる

其跡をみる者何も眼をおとろかしけり

【第十四段（詞14）】

大將軍は下野の押領司藤原秀郷常
陸大丞貞盛なりけるか同二月八日に重て
公卿僉義有て宇治民部卿藤原忠文
副將軍の宣旨を蒙て舍弟形部大將仲
□もともに下向せられける彼卿者白河
宰相五代の末參議季良か男なり駿河國
富士の麓野浮島原を前に當て清見関に
宿して侍りけるに蟹のいさり火ほの見えて
折節心すみけるに清原の滋藤と〔云〕人を
もともなへりけるか滋藤

漁舟火影冷焼波驛路鈴聲夜過山

といふからうたを詠したりけるに將軍泪を
そなかし給ひける

【第十五段（詞15）】

去程に秀郷貞盛は終に凶徒の軍に打ち
かつて將門か頭其外同舍弟か頭とも持せ

てさ、めいて上りける程に駿河國³²きよ
みか関³³にて行逢それより前後の大將打
つれて上洛す貞盛秀郷には勸賞おこ
なはれ其粧ひいふはかりなし

【第十六段（詞16）】

將門承平中よりおほくの人をうしなひ朝家
のわつらひとなりぬれ共天慶三年二月十四日
秀郷か為に誅せられにけり其歳³⁴謹³⁵に六七也
むかし入鹿の大臣⁵⁴天下を傾しに天智天皇
三年六月十四日大極殿にして鎌足⁵⁵入鹿を
うち給ひて内大臣⁵⁶に成給ひきは内大臣の
はしめなり同四月廿五日に將門か頭都に
つき大路を渡りて左の獄門の木にかけらる
あはれなるかなきのふは東夷の親王と
かすつかれしかとも正しく王位をそむきし
天運よと皆人毎に云あへりけりそれ
より世おさまりて以来貳百七拾七歳⁵⁷其
間帝王二十三代臣又接録をふみて
今の撰政までは九代なりされは秀郷
けうそく八代のこういんをうけていまた
御てきをほろほすにこそと人々申
あへりけり

【第十七段（詞17）】

かくて副將軍宇治民部忠文はつゐに
勸賞蒙らざりけれとも九條殿御詞畏内
裏をまかり出けるか大地もひ、き大山もくつ
る、はかりの音声を以て口惜事なり同
勅命を蒙て同朝敵を亡し一人は賞に
預り一人は恩にもる、小野宮殿の御は
からひ生、世、不可忘家門をなかくう
しなはんと匍り左右の手をにきり給へは
八の爪手の中に通ひ血ななれ出ければ
各肝魂をけし給ひけるか宿所に帰り
一夜かうちに白鬢となりて終日食事
をと、め⁵⁸終にうせにき悪霊となり
さまくおそろしき事ともおほかり
ける則神にいは、れ給ひて宇治に
おはします離宮明神⁵⁹これなりいかなる
事にや祭の日はわらはへのおほく集り
侍るとそこれより小野宮との子孫絶
はて、九條殿は一言の情に依て
撰政関白今にたえさせ給はず

延宝七年霜月末
繪十六切

注

- 1 朱雀天皇。延宝九年（九二二）・天曆六年（九五二）。第六一代天皇。延長八年即位、在位十七年。平将門、藤原純友の乱を、兵を遣わして平定した。
- 2 承平二年（九三二）十月二十日。
- 3 近江国瀬田。現在の滋賀県大津市瀬田。琵琶湖から流れる瀬田川の東岸にある。
- 4 金戒光明寺本では「たや」の後に「すく橋を」と続いている。
- 5 平安時代中期の下野の豪族。世に俵藤太と呼ばれる。藤原北家魚名の子孫。天慶の乱がおこると、平貞盛とともに平将門を攻め、これを鎮圧した。その軍功により従四位下、下野守に任じられた。子孫は東国に広がった。
- 6 瀬田の唐橋、瀬田の長橋。琵琶湖から瀬田川に流れ出るところにかか
る橋。
- 7 蝦夷を征討する職。
- 8 古代、鎮守府、征夷使の第三等官。副將軍の次の官。
- 9 非常に高い、あるいは深いこと。
- 10 金戒光明寺本では「いまや」となっている。
- 11 現在の滋賀県琵琶湖西岸の地名。
- 12 五人で弦を張る弓。
- 13 節近。竹などの節と節との間の近いこと。
- 14 三伏。指三本を伏せた幅。
- 15 矢の筈の根本。
- 16 矢の上端の弦を受けるところ。
- 17 羽ぶくら。矢につけた羽。
- 18 毒気を吐いて人を害するという想像上の動物。蛇に似た長い体に四肢を持つ。
- 19 「炬にて」の箇所が、金戒光明寺本では「石た、み煖にして」となっている。
- 20 先端を結んだ俵
- 21 米や穀物類を納めておく倉。
- 22 寺院。
- 23 現在の滋賀県大津市にある天台宗寺門派の総本山。
- 24 弥勒があらわれて人々を教化する世。
- 25 天慶二年（九三九）三月九日。
- 26 勲賞の除目。功勞を賞して官位、土地、物品などを授けること。
- 27 旧国名。現在の東京都・埼玉県、一部神奈川県。
- 28 旧国名。現在の群馬県。
- 29 藤原千常。
- 30 平安中期の武将。鎮主府將軍。藤原秀郷とともに將門を討った。その軍功により従五位上、右馬介、鎮主府將軍に任ぜられた。さらに陸奥守
従四位下に昇進した。
- 31 位階のうちの一つ。正六位の上。正五位の下。
- 32 旧国名。今の青森・岩手・宮城・福島の四県。
- 33 藤原忠文。貞観一五年（八六三）・天曆一年（九四七）。平安時代の朝

臣。天慶二年参議に任ぜられた。天慶三年、征東大將軍として平将門の乱平定に下向したが、到達に先立って将門は誅せられた。翌年征西將軍に任ぜられ、藤原純友討伐に向かっている。

34 平将門。

35 藤原実頼。

36 藤原師輔。

37 刑罰。

38 全員で評議すること。

39 前漢第六代の皇帝。

40 天照大神。伊弉諾尊の娘。皇室の祖神。

41 記紀伝承上の初代天皇。

42 武藏しんのかみおきよ権守興世・興世王

43 旧国名。現在の神奈川県。

44 旧国名。現在の千葉県中央部。

45 金戒光明寺本では同金次正衡。

46 天慶三年一月十一日。

47 右京職の長官。

48 「真志をあらはさしめんこの」の箇所が、金戒光明寺本では「土器を論す秀郷先吞へきを将門かこゝろをあらはさしめんか」となっている。

49 矢合わせ。開戦の合図として軍が互いに矢を射交わすこと。

50 風に乗って飛んでいくこと。また風のように飛ぶこと。

51 李老の術。勇猛な武術。

52 旧国名。今の静岡県の中央部。

53 清見ヶ関。平安時代、今の静岡市興津の清見寺の地にあった関。

54 蘇我入鹿。

55 中臣鎌足。

56 令外官の一つ。左右大臣に次ぐ権限、待遇を持つ。

57 二七七年。鎌足の話から将門の話までの歲月。

58 「と、め」の箇所が、金戒光明寺本では「とめ」となっている。

59 末多武利神社。

【資料四】尾形守房の制作した画稿

	名称	制作年代	落款銘文等	目録番号	名前
1	蒙古人騎馬図	寛文九年(一六六九)	落款「寛文九年五月中旬/□□亀之助写」画(中)墨書「廿」	一三七二	野中龟之助
2	陳簡齋図	寛文一〇年(一六七〇)	落款「寛文十年七月廿九日/亀之助写之」画(中)墨書「探幽法印行年七十一歳筆」	一七九七	野中龟之助
3	孔子図	寛文一一年(一六七一)	落款「寛文一一年五月廿九日/亀之助」	一九六三	野中龟之助(守辰)
4	弥勒菩薩図	寛文一一年(一六七一)	落款「寛文一一年五月廿四日/亀之助主/守辰」	四四	野中龟之助(守辰)
5	達磨図	寛文一一年(一六七一)	落款「寛文一一年十月十七日/亀之助/守辰/ウツス」画(中)墨書「□□探筆/探幽筆/探幽筆」	一一四〇	野中龟之助(守辰)
6	西王母図	寛文一一年(一六七一)	落款「寛文一一年十一月二日ウツス主/亀之助/守辰」画(中)墨書「西王母」	二五七	野中龟之助(守辰)
7	唐武人図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年三月五日/亀助/守辰/ウツス主」	一三九二	野中龟之助(守辰)
8	牡丹図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年五月廿三日/亀之介/守辰主ウツス」画(中)墨書「二幅ノ内/松平新太郎内/日置□右衛門」	三二四〇	野中龟之助(守辰)
9	福神図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年亀之助/守辰主/七月十八日ウツス」画(中)墨書「法印探幽行年六十九歳筆」鑑蔵印「尾形氏ノ之珍藏」	二八七	野中龟之助(守辰)
10	達磨図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年 亀ノ介/七月廿七日守辰主/ウツス」画(中)墨書「月壺ノ達磨」	一一二九	野中龟之助(守辰)
11	竹林高士図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年八月三日/亀之助/守辰/ウツス主」裏面墨書「ウツシ」	一三七六	野中龟之助(守辰)
12	二祖大祖禪師像	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年八月上旬/野中龟之助」画(中)墨書「讚 西磣 名子曇宋人皈化住建長寺徳治年中ノ人」賛「二祖大刀禪師/冥坐香山□寛可/少林春信大寛枝/利刀截下濟生臂/端的親傳屈殉衣/子曇拝讚」	一一五〇	野中龟之助
13	騎驢高士図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年十月上旬/野中龟之助写」	一五五一	野中龟之助
14	仙人図	寛文一二年(一六七二)	落款「寛文一二年十二月十一日 亀之助写」	五一九	野中龟之助
15	孔子図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年二月十日/亀之助写」画(中)墨書「松平陸奥殿掛物」	一六七八	野中龟之助
16	高士図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年二月廿三日/亀助」画(中)墨書「探幽法印行年七十一歳筆」	一五七七	野中龟之助
17	寒山図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年二月廿六日/亀之助写」画(中)墨書「禅月大師筆」	一七六〇	野中龟之助
18	周文主図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年三月六日/亀之助写」画(中)墨書「周文王 探幽筆」	一九六五	野中龟之助
19	寿老人図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年 四月朔日 亀之助写 平野氏主」	三六四	野中龟之助
20	張良図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年亀之助写/卯月十二日」	一八六一	野中龟之助
21	唐武人図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年卯月十三日/亀之助写」画(中)墨書「探幽法印行年七十歳筆」	一六一八	野中龟之助
22	鯉の滝昇り図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年卯月十五日」	三四四四	野中龟之助
23	白衣観音図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年卯月十九日」	六七	野中龟之助
24	福祿寿図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年卯月廿一日」	五六七	野中龟之助
25	達磨図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年五月十五日 亀之助写」画(中)墨書・印章「官内卿法印行年七十二歳謹圖之」	一一四二	野中龟之助
26	騎驢達磨図	寛文一三年(一六七三)	文長(円印)「筆筆」朱文(瓢印)	一一四九	野中龟之助
27	黄石公張良図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年五月十六日亀之助写」画(中)墨書「探幽法印行年七十一歳筆」	一一四二〇	野中龟之助
28	騎馬観音図	寛文一三年(一六七三)	落款「寛文一三年六月十日/亀ノ助写」画(中)墨書「探幽法印行年七十一歳筆」裏面墨書「石黄張良 探幽筆」	六五	野中龟之助

29	雑画	寛文一三年(一六七三) 正徳六年(一七一六)	落款〔菅業達磨図〕「寛文十三年亀□/卯月十一辰□」〔夕陽図〕「正徳六丙申年五月下旬 小方市左衛門写」 画 中 墨 書・印 章〔菅業達磨図〕「探幽法印行年七十二歳筆」〔朝陽図〕「朝陽」〔安信筆〕「右/京」〔白文方印〕 〔東坡舟遊図〕「東坡」〔安信筆〕「右/京」〔白文方印〕 〔夕陽図〕「夕陽」〔安信筆〕「右/京」〔白文方印〕	四六九六	野中亀之助 尾形市左衛門
30	法然上人絵伝	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年 十月十五日 野中守辰写之」	九二一	野中守辰
31	琵琶法師図	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年十月廿一日」〔野中守辰写之〕	一一五五	野中守辰
32	僧侶図	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年十月廿一日 野中亀之助写之」画 中 墨 書「探幽法印行年七十二歳圖之」	一〇三四	野中亀之助
33	縄衣文殊図	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年十月廿二日」〔野中守辰写之〕 印章「松/溪」〔朱文方印〕 賛「手執一卷経/口中無言説/師利法王尔/是認真説法/永楽三年四月日/天童比丘□知賛」〔白字方印〕(二顆)	一〇三三	野中守辰
34	竜虎に仙人図	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年十二月十九日 野中源太郎写」画 中 墨 書「探幽法印七十一歳筆」	三三七	野中源太郎
35	黄石公張良図	延宝元年(一六七三)	落款「延宝元年十二月廿日」〔野中源太郎写〕 画 中 墨 書「探幽法印六十九歳筆」	一八〇四	野中源太郎
36	福祿寿図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年正月十七日 野中源太郎写」	二八四	野中源太郎
37	菊に蝶図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年二月六日 野中源太郎写」画 中 墨 書「探幽法印行年七十一歳筆」	三四九三	野中源太郎
38	維摩居士図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年二月八日 野中源太郎写」画 中 墨 書「為□禪老和堂四明天童第一座雪舟謹図之」	一八五	野中源太郎
39	唐人物図	延宝二年(一六七四)	落款「□寶二年二月八日/野中源太郎写」画 中 墨 書「北村喜兵□法眼筆」	一七一一	野中源太郎
40	耕作図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年三月六日/野中源太郎写」	一七四〇	野中源太郎
41	雨中曳馬図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年三月九日/野中源□」	四五一三	野中源太郎
42	耕作図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年三月十日/野中源太郎写」裏面墨書「所/公方御休所出来/法印探幽筆/公方御休處出来」	一七四一	野中源太郎
43	芦雁図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年卯月五日/野中源太郎写之」	三九九四	野中源太郎
44	迦葉観音図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年卯月十六日 野中源太郎写之」画 中 墨 書「廻向院寄進 妙智院感良通信女/為菩提宮内卿法印探幽行年七十三」	六六	野中源太郎
45	愛馬図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年五月八日」〔野中源太郎写之〕 画 中 墨 書・印章「書記」〔祥/啓〕〔白文方印〕	三三七二	野中源太郎
46	滝に唐獅子図	延宝二年(一六七四)	落款「延宝二年五月十一日/野中守辰うつし」	三七九五	野中守辰
47	波濤図	延宝三年(一六七五)	落款「延宝三年二月廿六日/野中源太郎写」	四二二三	野中源太郎
48	盤古・神農・文王図	延宝三年(一六七五)	落款「延宝三年三月廿二日」〔野中源太郎写〕 画 中 墨 書「探幽法印筆」 鑑蔵印「尾形氏/之珍藏」	一六四二	野中源太郎
49	寿老人図	延宝三年(一六七五)	落款「延宝三年後ノ四月十八日」〔野中市左衛門写〕	五五二	野中市左衛門
50	鍾馗図	延宝三年(一六七五)	落款「延宝三年十一月廿一日野中源太郎写」裏面墨書「馬リン」	五九四	野中源太郎
51	小野小町図	延宝四年(一六七六)	落款「延宝四年正月廿日」〔野中市左衛門写主〕 画 中 墨 書「探幽齋筆」 賛「色見えてうつろふ/物は世の中の人のこころのはなにぞ/有ける」	一一〇六	野中市左衛門
52	鍾馗図	延宝四年(一六七六)	落款「延宝四年正月廿四日 野中市左衛門主」	四六一	野中市左衛門
53	吉祥天図	延宝四年(一六七六)	落款「野中市左衛門写」〔延宝四年正月廿五日〕	一一八	野中市左衛門
54	鷹図	延宝四年(一六七六)	落款「延宝四年六月下旬」〔野中市左衛門主〕	三七八四	野中市左衛門
55	琴棋書画図	延宝四年(一六七六)	落款「延宝四年七月下旬/野中市左衛門写之」 鑑蔵印「尾形氏/之珍藏」	一六八〇	野中市左衛門
56	白衣観音図	延宝五年(一六七七)	落款「延宝五年二月廿一日 野中市左衛門写」画 中 墨 書「法印探幽筆」	五七	野中市左衛門
57	仙人図	延宝五年(一六七七)	落款「欠損 月廿一日」〔劉俊 野中市左衛門主〕 画 中 墨 書「浪に仙人 劉俊筆」	五一八	野中市左衛門
58	寿老人観書図		落款「野中亀之助写」	六〇二	野中亀之助

87	羅漢図	元禄一三年(一七〇〇)	落款「元禄十三年庚辰七月下旬」[守房写] 印章「□山□□寺」(朱文长方印)	一七一	守房
86	岩葉達磨図	元禄二年(一六九二)	落款「小方守房写」元禄十二年「丑十月十一日」印章「朱文方印」	二〇二	小方守房
85	観音菩薩図	元禄二年(一六九二)	落款「元禄十二年己卯四月廿一日」[守房写] 画中墨書「上三松有 観音大士像 明兆筆」	六九	守房
84	花鳥図	元禄二年(一六九二)	落款「元禄十二年己卯二月中旬」[守房写] 画中墨書・印章「呂紀」(朱文方印)「花鳥 呂紀筆」	三八五九	守房
83	山水図	元禄一年(一六九一)	落款「元禄十一年寅十月二日」[守房うつし] 画中墨書「文進筆」	二一一二	守房
82	白衣観音図	元禄九年(一六九六)	落款「元禄九年子ノ九月十二日」[守房写]	八七	守房
81	寒山図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年ノ亥ノ七月上旬」[守房うつす] 画中墨書「啓書記筆」賛「一指拄古今曾是□」絶音月出入不識 山葉ノ無遮心	一八六四	守房
80	鷹図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年ノ亥ノ六月下旬」[守房写] 画中墨書「右五」	三六七七	守房
79	達磨図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年亥六月廿四日」[守房写]	一九五	守房
78	鷹図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年ノ亥六月中旬」[守房写] 印章「田□」(朱文长方印)「ソソノヨクカウ」(朱筆「直ノ翁」(朱文方印)	四一五二	守房
77	鷹図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年ノ亥六月上旬」[守房写] 画中墨書「左二」	三七四七	守房
76	鷹図	元禄八年(一六九五)	落款「元禄八年ノ亥六月上旬」[小方守房写] 画中墨書「左一」	三七四五	小方守房
75	如来に羅漢図	元禄七年(一六九四)	落款「元禄七年戌ノ六月上旬」[小方喜六写]	四〇	小方喜六
74	騎馬鍾馗図	元禄六年(一六九三)	落款「元禄六年 守房写」西ノ十二月廿七日	四四八	守房
73	千利休像	元禄六年(一六九三)	落款「元禄六年五月下旬」[守房写] 画中墨書「利休居士像」	八五八	守房
72	一休禅師像	元禄五年(一六九二)	落款「元禄五年二月十七日」小方喜六写 賛「倚天長鏡光ノ骨髄露堂々ノ曲泉木床上ノ風流好□賜ノ江州太 守仙翁宗椿居士ノ圖余願質需贊不免書ノ塞其請」(前任紫野大徳禪寺順一休叟天下老和尚)	六六〇	小方喜六
71	十一面観音図	貞享二年(一六八五)	落款「貞享二年ノ丑ノ六月中旬」小方喜六主	九五	小方喜六
70	官女図	天和二年(一六八二)	裏面に五位鸞図あり、裏面墨書「天和二年六月十五日小方喜六写ノ宮脇竹次分」	一〇二二	小方喜六
69	牧童騎牛図	延宝九年(一六八一)	落款「延宝九年四月中旬」[小方喜六写] 画中墨書「雪舟筆」	一九八六	小方喜六
68	藤原秀郷龍宮城図	延宝七年(一六七九)	落款「小方喜六主ノ延宝七年霜月末ノ絵十六切」[小方喜六之写]	一〇五三	小方喜六
67	寿老人図	延宝六年(一六七八)	落款「延宝六年八月中旬」[小方喜六] 画中墨書・印章「朱文方印」[印不知秋月]	四二一	小方喜六
66	唐人抱鶴図	延宝五年(一六七七)	落款「延宝五年九月六日」小方喜六写 画中墨書「米光」[法印探幽行年六十七歳筆]	一八四六	小方喜六
65	加茂競馬図		落款「卷首裏」[の申守辰主] 卷首裏墨書「加茂競馬 光信筆 尾形主藏」卷首部裏打紙「加茂競馬」画 書「□ひつ□出す」	四五一八	野中守辰
64	花鳥図		落款「野中守辰写」	三六二〇	野中守辰
63	牡丹唐獅子図		落款「守辰ウツス」	二八五九	野中守辰
62	唐獅子図		落款「野中源太郎ノ守辰写」	四一八五	野中源太郎
61	秋景山水図		落款「野中源太郎写」	二六四六	野中源太郎
60	九相図		落款「野中源太郎ノ守辰写」	一三三九	野中源太郎
59	野馬図		落款「野中源太郎ノ守辰写」	二六四六	野中源太郎
			落款「亀之助写」画 中墨書「探幽法印行年七十歳筆」 卷首裏面墨書「人間死ヨリ白骨トナル迄ノ 変相実体畫」[玊ナレトモ稍気味ワルシノ 未開時代追想トナル] (卷頭別紙貼付) 落款「野中亀之助主」	一三三九	野中亀之助

118	雪中山水図		落款「小方喜六写」画中墨書「十二枚之内」裏面墨書「右九／守辰主」	二二二八	小方喜六
117	聖賢図		奥書「此銘依懇望書付畢／禁中紫宸殿 賢聖之写依／所望圖之／寛文貳年寅極月日狩野探法印筆／小方守房写」鑑蔵印「尾形氏ノ之珍藏」添紙墨書「探幽筆模写／紫宸殿聖賢圖」西京紫宸殿聖賢圖／狩野探幽依懇願為縮圖 尾形藏	一八一	小方守房
116	李白觀瀑図		落款「小方守房」裏面墨書「李太白 探幽筆」	一五五六	小方守房
115	七福神図		落款「守房」	五九三	守房
114	役行者図		落款「守房」	二七七	守房
113	那俱羅尊者図		落款「十三枚之内 小方守房写」画中墨書「第七那俱羅尊者住○羅洲／○儂」	一九七	小方守房
112	羅漢図		落款「小方守房写／十三枚之内」	一九五	小方守房
111	羅漢図		落款「小方守房写 十三枚之内」	一九三	小方守房
110	羅漢図		落款「小方守房／十三枚之内」	一八九	小方守房
109	羅漢図		落款「小方守房写／十三枚之内」	一八八	小方守房
108	羅漢図		落款「尾形守房写 十三枚之内」	一八六	尾形守房
107	羅漢図		落款「小方守房写／十三枚之内」	一八四	小方守房
106	羅漢図		落款「守房写」	一六六	守房
105	羅漢図		落款「十三枚之内／小方守房写」	一六二	小方守房
104	羅漢図		落款「小方守房／十三枚之内」	一五九	小方守房
103	釈迦如来図		落款「守房」	九	守房
102	牡丹に雉図	宝永六年(一七〇九)	落款「宝永六年／丑二月廿二日於江戶写 幽元」	四〇〇	幽元
101	楼閣山水図	宝永四年(一七〇七)	落款「宝永四年十一月十九日亥陸治筆 守房字取之」	二五九八	守房
100	白衣観音図	宝永四年(一七〇七)	落款「宝永四年亥四月下旬京都二而写／守房」画中墨書「土佐光信筆」	一一三	守房
99	吉葉達磨図	宝永三年(一七〇六)	落款「寶永三年／戌十月下旬」守房うしし	一一九六	守房
98	花鳥図	宝永元年(一七〇四)	落款「□永元年申□□月中旬」守房写 画中墨書「王若水筆」裏面墨書「花鳥王若水筆」	二六九三	守房
97	阿弥陀如来図	元禄四年(一六八七-七〇四)	落款「元禄四年 九月廿五日 守房／絵所之覚」	三八	守房
96	釈迦涅槃図	元禄二年(一七〇三)	落款「元禄□六年未之十二月月上旬より甲之正月十日□仕上候」尾形守房写 画中墨書「土佐光信筆」涅磐図	二	尾形守房
95	金輪仏頂曼荼羅	元禄二年(一七〇三)	落款「元禄十六年／未十二月月上旬」守房写 画中墨書「金輪之像」	一	守房
94	騎獅文殊図	元禄五年(一七〇二)	落款「元禄十五年 午十一月月上旬」守房うしし	七六	守房
93	月下雪梅図	元禄十五年(一七〇二)	落款・印章「元禄十五年午四月上旬 守房写」重信ノ之印(朱文方印) 引首印「白文長方印」雪凝鐵幹 光如玉月照水ノ姿色似銀 雪湖劉世儒「□印／世儒」(朱文方印)「山陰ノ人」(白文方印)※賛あり(省略)	三三七	守房
92	山水図	元禄十五年(一七〇二)	落款「元禄十五年 午二月廿□守房」画中墨書・印章「夏珪／□禹王寧ノ宗朝之也」□珪筆「白文方印」	二六二六	守房
91	唐婦入図	元禄十五年(一七〇二)	落款「元禄十五年／午二月廿六日 守房」画中墨書「フナゴウアリ」	一六二四	守房
90	芦葉達磨図	元禄四年(一七〇二)	落款「元禄十四年／己十一月月上旬／守房」画中墨書「周丹士筆」※賛あり(判読不能)	二二五四	守房
89	鯉図	元禄四年(一七〇二)	落款「元禄十四年／己三月十八日／守房」	三四一七	守房
88	唐人物図	元禄四年(一七〇二)	落款「守房」元禄十四年／己三月十八日	一七五八	守房

134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119
供物献上図	庭園図	波濤に竜図	花鳥図	鷹図	鷹図	鷹図	鷹図	鷹図	鷹図	鷹図	赤鷹図	鷹図	鷹図	鷹図	山水図
落款「十二枚之内二番守房」画 中墨書「二」	落款「十二枚之内／守房」画 中墨書「八／上二寸五分」「下一寸」	落款「小方守房写」	落款「守房写」	落款「守房」画 中墨書「薄赤□網掛」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「三番 小赤白」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「二番 網掛鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「七番府墨府鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「八番山回り鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「片鳥屋鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「赤鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「九番 青白鷹」 「十二枚之内」	落款「守房」画 中墨書「十二枚之内」 「四番 シボ鷹」	落款「守房」画 中墨書「十二枚之内」 「六番 目替リクハクタイ白」	落款「守房写」画 中墨書「玉洞筆」
四四四九	四三七一	四一〇二	四一〇二	三八一七	三八一六	三七五三	三七五二	三七四九	三七四四	三七三五	三七三四	三六八三	三六七五	三六七四	二四〇七
守房	守房	小方守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房	守房

※本表は福岡県立美術館編『尾形家絵画資料目録』（西日本文化協会、昭和六一年）に掲載されている情報を抜粋し制作したものである。「目録番号」には、当該書記載の番号を記した。

福岡藩御抱え絵師の研究（一）

尾形家絵画資料 尾形守房筆「藤原秀郷龍宮城図」画稿

（金戒光明寺本との比較を中心に）

小 井 日
林 野 形
知 綾 栄
美 子 子

筑紫女学園大学

人間文化研究所年報

第二十九号 二〇一八年